

2016年

携帯サイトへGo!→
携帯で教室便利が見られます



教室だより 3月号

ひなまつりの起源

ひなまつりは、古くは「上(じょう)巳(し)の節句」「弥生の節句」などと呼ばれ、五節句のひとつにあたります。女の子がいる家ではこの時期にひな人形を飾り、白酒や桃の花を供えてお祝います。

ひなまつりの起源は中国までさかのぼります。

昔、漢の時代に徐肇(じょちょう)という男性があり、3人の女兒をもうけたにも関わらず、3人とも3日以内に死んでしまいました。その嘆き悲しむ様子を見た同じ村の人たちが酒を持ち、3人の女兒の亡骸を清めて水葬したことに由来しているとされています。

それが平安時代になると、「上巳の祓(はら)い」といって、3月3日に陰陽師を呼びお祓いをさせ、自分の身に降りかかる災難を自分の生年月日を書いた紙の人形(ひとがた)に移らせて川に流しました。

この紙の人形(ひとがた)が発展し、現在の豪華なひな人形になったとされています。また、ひな壇を設けるようになったのは、江戸中期からだそうで、それまでは畳に直にじゅうたんを敷き、人形や調度を飾っていたようです。

おひなさまは、悪いことから女の子を守ってくれる守り神。

ひなまつりの起源に倣(なら)って、手作りの紙のおひなさまを飾ってみてはいかがでしょうか。

公文式の創始者・公文 公(くもん とおる)先生の言葉より

“可能性を追求する”

す公文式は個人別の学習法です。年齢や学年にこだわることなく、むしろ、できるだけ早く学校で習っているところより先の段階に進んでいくように学習します。それは、まだ習っていない領域を自分自身の力で進んでいくことによって、自分にもできるということを知り、さらにその先の内容も学習したいという意欲をもってほしいからです。

自分の学年より2学年、3学年分先へ進んでくると、子どもは学力面ばかりでなく自主性、積極性、判断力、創造性などにおいてもめざましい進歩をみせるようになります。ですから、学年を越えてからも大いに進めてあげることこそ子どもへの親切です。

「読み、書き、計算」の確固とした学力を基盤にした、このような「やれば、できる!」という自信と意欲とが子どもの人生をより豊かなものにするはずです。今日のがんばりの向こうに、もう一回り大きな自分があることを信じ、意欲的に学習を続けていける子どもに育てたいものです。

2016年 3月の学習日

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20 春分の日	21 東祭日	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

本市場教室日□

横割教室日△

えいこせいすい
栄枯盛衰
人生や世の中のいきおいなど、ものごとにはさかんな時期とおとろえる時期があること。
「十年前はにぎやかだった商店街も今やすっかりさびれてしまいい、栄枯盛衰を感じる。」
「スポーツも栄枯盛衰で、今は負けてばかりのあのチームも、昔は優勝したそふだ。」
くもん出版刊「四字熟語カード」より

今月の四字熟語

ゆき子の一言コラム

「わかる」と「できる」は一直線ではない

大人に新しいことをわからせるのは、そうむずかしいことではありません。大人はすでに多くの知識や経験をもっているのです。その知識と知識を結合することによって、新しい概念を想像することが比較的かんたんにできるからです。ところが、子どもは材料となる知識や経験が少なくあいまいなので、新しいことをわからせ、できるようにさせるのはたいへんなことなのです。たとえば、 $7+8=15$ を理解させるのに、「7は5と2でしょ。8は5と3でしょ。5と5で10、2と3で5。だから、10と5で15」と説明します。たしかにこれを学習する時点では、「7は5と2」「8は5と3」というのは既知のはずですが、多くの子にとってはそれ自体もあいまいですし、「7は5と2」「8は5と3」ということを大人の論理で説明しても、子どもたちは大人のようにはわかることができません。大人の論理によってほんとうの理解に至らせようと何時間も費やされることは、子どもにはしんどいことなのです。ですから、子どもの場合は、「わかる」というのは十分に理解するというのではなく、「それなりに納得する」というところにとどめておいていいと思います。それよりも、一応の納得のあと、「できる」ためにきちんと指導しながら学習する時間を多くとったほうが得策です。数えてできるようになった子、補数からできるようになった子、5のかたまりでできるようになった子、まるおぼえの子、とりあえず全員なんらかの方法で「できる」ようにしてやるのが大切なのです。私には、子どもが「わかる」から「できる」へと一方向にすすむように学習をしているとは思えないのです。子どもの学習は一直線ではなく、「わかる」「できる」「より深くわかる」「よりよくできる」というふうに進んでいくと考えています。そして子どもにとってのキーポイントは「わかる」ではなくて「できる」なのだ確信しています。「できる」ということは子どもにとって至福の喜びですし、「できない」ことは本当に悲しいことです。指導者にとって大切なことは、子どもをできるようにすることなのです。小学校の低学年では「できる」ことを優先させ、高学年でもう一度「わかり直させる」ことが大切です。高学年を教えていると、子どもたちがときどき「ああ、そうだったんか」とすっとんきょうな声を出すことがあります。その子は、高学年の課題をやりながら、「学び直し」「わかり直し」をしているのです。子どもは知識や経験は乏しいですが、すなおにまねをする術を知っています。一応の納得がいったら、すなおに先生のまねをさせ、できるようになったらうんとほめてやって、どんどんできることを増やしていくことが必要ですし、そしてできるようになったら、確実に自分のものになるように習熟させることが大切です。そのなかで、「よりわかる」「よりできる」ようになっていくのです。

(小学校六年間でつきたい力)

- ①一斉授業のなかで自分を生かし、自分をきたえることができる力
学習課題をもって授業に参加し、教師・友だちとともに授業をつくることができる。自分の意見、友だちの意見を大切に、課題を深める発言ができ、授業づくりについての評価ができる。
 - ②家庭学習の習慣がついており、一日1時間程度のひとり学習ができる力
宿題がなくても、テスト勉強や予習、復習など、自分で課題を見つけて家庭で一人学習に取り組める。
 - ③よどみなく音読ができ、はじめての文でも逐語的読解ができや力（読む）
すべての教科の音読がよどみなくできる。読解することで、筆者の意見を正確に述べ、自分の意見もつけ加えることができる。いつでも読みさしの本を身近にもって、時間があれば読書する習慣がある。
 - ④ノートを工夫してつくる、学習したことを文章化できる力（書く）
調べ学習などをレポートとしてB4一枚にまとめることができる。1006字の漢字をマスターしている。
 - ⑤小数・分数までの四則ができ、わり算・かけ算の活用ができる力（計算）
単位あたりの量がわかり、速度、割合などに活用できる。倍数・約数の活用ができる。
文章題を単位をつけて立式することができる。
 - ⑥授業中、自分の意見を友だちの意見と関連づけて発言でき、司会ができる力（話す）
 - ⑦自分の意見と同じところ、ちがうところを整理しながら聞くことができる力（聞く）
 - ⑧理科、社会の知識のネットワークを確実につくりあげる力
 - ⑨自分に関心をもち、自分をゆたかにきたえようとする力
 - ⑩他者に興味をもち、あこがれや共感、ちがいを感じ、交流しようとする力
- このように整理していくと、もうほとんど大人とかわらないということがわかります。
1年生入学当時に比べると、6年生でたいしたことをやりとげているのだなあ、と、ある種の感慨をおぼえますね。

お休みのときは、電話でも携帯メールでも結構ですので連絡をお願いします。3月分の会費引き落としは2月29日(月)です。よろしくお願いいたします。

(注)休会・退会の場合は、引き落としの関係から15日までにお申し出下さい。

お迎え電話を教室からする子には必ず電話代10円を持たせてください。